

伝統染織技術と地場産業の現状

Present situation of traditional textile technology and local industry

9830109 町田この実 Konomi Machida

1. 目的

我が国の繊維産業は、江戸時代に、各地で繊維材料や、染料などの栽培技術の発達とともに発展し、更に東南アジア方面からの染織技術も加わり、独自の衣生活文化を築きあげてきた。明治時代に機械化が導入され、それまでの伝統的な染織技術を基礎に大量生産が可能なる方向へと発展をとげた。また、同時に天然染料にかわって化学染料が使われ始めた。しかしその経済的発展とともに伝統的な染織技術も、経済効率などの点から消滅しようとしており、日本人の今日の衣生活は特徴のないものになってきている。そこで、日本人の衣生活文化を再度認識し、一般の生活へ受け入れが可能であればどのような策をとれるかなどを明らかにし、今後の生活の質の向上、見直しに寄与することを目的とした。

2. 調査方法

2.1. 主な調査地域と染織品

日本各地の染織技術にはどのようなものがあるかを調べ、更に以下の三地域については詳しく調査した。

- i) 埼玉県川越市：川越唐棧
- ii) 千葉県館山市：館山唐棧
- iii) 岐阜県郡上郡：郡上紬

2.2. 調査項目

- i) 伝統染織の起り
- ii) 伝統染織品の工程
 - ・ 材料の入手法
 - ・ 紡糸、紡績技術
 - ・ 染織技術
 - ・ 製織技術
- iii) 伝統染織品の現状（生産、流通）

2.3. 調査資料

- i) 各商工会議所資料
- ii) 各県史
- iii) 伝統染織展示品（川越市立博物館、郡上八幡博覧館）

3. 調査結果

3.1. 日本各地の伝統染織 [1]

伝統染織は、日本各地に分布している（1998年現在）。その中で、国指定重要無形文化財や都道府県指定無形文化財に指定・認定されているものが多数ある。

<国指定重要無形文化財>

越後上布・本場結城紬・久留米緋・芭蕉布・宮古上布

<都道府県指定無形文化財>

紅花織・白たか織・長井紬・しな布・会津上布・小千谷紬・本塩沢・唐棧織・黄八丈・信州紬・天蚕紬・能登上布・郡上紬・西陣織・藤布・丹波布・弓浜緋・広瀬緋・日向紬・大島紬・綿薩摩・紅型・琉球緋・花織・八重山上布

3.2. 埼玉県川越市：川越唐棧

3.2.1 唐棧織について

「唐棧」とは唐棧留の略であり、「唐」とは外国の意で「棧留」とはインドの東海岸の繊維産地マドラス地方バザール地区にある港町セントトーマスに因る。ここで生産され、1638年に日本に初めて到来した木綿縞のことである。この時輸入された唐棧は、経緯糸に染色した細い木綿糸を2本引きそろえた双糸の平織である。その後、国内での木綿の栽培の普及とともに日本全国で織られるようになる。

3.2.2 川越唐棧の起り[2][3]

川越では江戸時代から唐棧織が織られていた（「川唐」1853年宇田川守貞「守貞漫稿」）。安政6年（1859）に中島久平氏がアメリカから80/2、120/2の洋糸を輸入し、川越地方の機屋に試織させた。元来、川越では京西陣から伝わった絹織物を対象とした高機技術があったため、そこに細番手の綿洋糸の導入が加わって高品質の唐棧が大量に織られるようになった。明治29年（1896）国産棉作がピークを迎えるとともに、川越唐棧も最盛期を迎えた。一般的な川越唐棧は、経糸緯糸ともに100番を使用し、糸染めは草木染め（藍、刈安、茜）であった。しかし、その後外棉輸入税廃止とともに国産棉作が急速に衰退し、一方、川越地方も

機械化（力織機）の導入に踏み切らなかったため、川唐は衰退していった。

3.2.3 川越唐棧の現状[4][5]

昭和 55 年、入間市の西村芳明氏が、綿糸をバット染料、硫化染料、反応染料により染色し、この双糸を力織機により製織する技術で復興した（一度に数十台が稼動することにより、量産が可能）。

一方、昭和 61 年、川越唐棧の復活・再生を願う川越市民の会「川越唐棧愛好会」が川越市で発足した。現在 60 人ほどの会員が、植物染色・手織りといった川越唐棧本来のやり方で活動している。また、唐棧織りを扱う呉服店を核とし「川越唐棧振興会」も発足して、商品として販売している。

3.3. 千葉県館山市：館山唐棧

3.3.1 館山唐棧の起り[6]

館山唐棧織は、明治時代に初代の斎藤茂助氏が東京の殖産所で川越唐棧織の製織技術を学んだ後、館山に移り、以後二代から四代にわたって技術が継承されている。昭和 59 年に千葉県の伝統的工芸品に指定された。

3.3.2 館山唐棧織の工程

- i) コンピューターで縞柄をデザインする
- ii) 植物を煎じて色素を抽出し、染液を作る
- iii) デザインに基づき糸を染め、水洗いする
- iv) 染め上がった糸に糊付けする
- v) 整経し、機にかける
- vi) 織機（高機）で織る
- vii) 織り上がった反物を砧打ちする

3.3.3 館山唐棧の現状

赤色以外は天然染料を使用し、手で織るといった伝統的技法で現在も生産、販売しているのは館山では斎藤家だけである。館山市内の販売店や東京都内の民芸品店で反物や小物製品を扱っている。また、インターネットによる販売方式も採用し始めた。

3.4. 岐阜県郡上郡[7]

郡上の農家では、江戸時代以前から地織り（くず繭をためて紡ぎ、草や木を煎じて染め、手織りで織った自家用紬）が大変盛んであった。これを郡上紬と言うが、昭和初期には衰退した。しかし、故宗広力三氏が、地織りと草木染めの伝統的な技法を発展させ、更に工芸

価値を付加した郡上紬を再生し、これが昭和 52 年、岐阜県重要無形文化財に指定された。現在では、二代目に技術が継承され、郡上工芸研究所で工芸作品として生産されている。

4. 考察

日本各地で長い時間をかけて発展してきた伝統染織技術は、今日の大量生産や使い捨てといった消費社会の中で、昔ながらの技法そのままの存続は困難となっている。各地域の独自性を残しつつ化学染料による染色やコンピューターによる織物デザイン、インターネットによる販売など、それぞれの面で技術的に修正されながら生き残っている。これは各地域で伝統染織に携わってきた人々の熱意によるところが大きい。しかし、各地域の技術を継承している人々の高齢化も深刻な問題である。そこで、①技術の継承②小規模ながら産業としての基盤を支える需要の二点において、住民の地場産業に対する理解を深める策をとることが必要である。それには、子供の頃から教育の一環として伝統に触れさせること、日常生活への導入などの策が各地域の特徴を認識し、ひいては伝統の継承、各地域の活性化につながるのではないかと考える。また、供給販売方式も少量多品種への対応としてインターネットの活用も考えられる。なお、個人的な芸術作品への発展は一般的な普及性の点では低くなるがそれなりの意義はある。

5. まとめ

各地域の伝統染織技術を、一般の生活への普及性を高めるには力織機による量産の方法など今日の技術によって改良できる点は改良する方法などがある。

6. 引用及び参考文献

- [1] 西田谷功「伝統織物—加賀・能登にみる歴史と現状」古今書院 1988
- [2] 森脇康行「川越織物について」川越図書館 1988
- [3] 川越教育委員会「川越人物誌」1983
- [4] 田中利明「武蔵野ペン」川越テッククラブ 1988
- [5] 新井雅久「織研さいたま会報」2001
- [6] 竹内淳子「藍（あい）Ⅱ.暮らしが育てた色」法政大学出版部 1999
- [7] 宗広力三「郡上紬に生きる」講談社 1987

（指導教官 駒城素子）